

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2020  
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「民話・伝説」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

選者コメント

1.『オリシャ戦記 血と骨の子』 トミ・アディエミ著 三辺律子訳 静山社 2019

◆西アフリカの神話をもとにした壮大な物語。〈魔師〉たちを支配し抑圧する王と、魔師たちとの激しい抗争を描いている。舞台は街、ジャングル、そして砂漠。登場人物はもちろん黒人。作者のあとがきには「この本に描かれた痛みや恐れや悲しみや喪失はすべて現実です」とある。新しいモダン・ファンタジーの誕生。

2.『目覚めの森の美女 森と水の14の物語』 ディアドラ・サリヴァン著 田中亜希子訳 東京創元社 2019

◆おとぎ話や昔話を大胆に書き換えた短編集。シンデレラは舞踏会にいかない。ガラスの靴もはかず、母親の靴をはく。「ヘンゼルとグレーテル」の話の主人公は魔女だ。とくに、「青髭」を元にした「やさしい重み」と、「美女と野獣」を元にした「美女と盤（ボード）」は、思いもよらない展開が楽しい。

3.『世界物語大事典』 ローラ・ミラー総合編集 越前敏弥訳 巽孝之監修 三省堂 2019



◆『オデュッセイア』『西遊記』から、『わたしを離さないで』『1Q84』まで、神話や中世騎士物語からSFまで、古今東西の98の物語が取り上げられている。絵や図版、写真や映画の写真などが満載で、ビジュアル的にも楽しい。

4.『ファンタジーの世界地図 ムーミン谷からナルニア国、ハリー・ポッターまで』 ヒュー・ルイス＝ジョーンズ編 東京堂出版 2019

◆作家、アーティスト、イラストレーターによる、「地図」と「ファンタジー」についてのエッセイ集。『ロビンソン・クルーソー』『ガリヴァー旅行記』から、ゲーム『ダンジョンズ&ドラゴンズ』の地図まで、驚くほどたくさんの地図がフルカラーで載っている。本が別世界への扉なら、「地図は招待状」だ。そして、そういった出会いのためにみんなに開かれているのが図書館だ。

選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

## 5.『伝説』 柳田國男著 岩波新書 1940

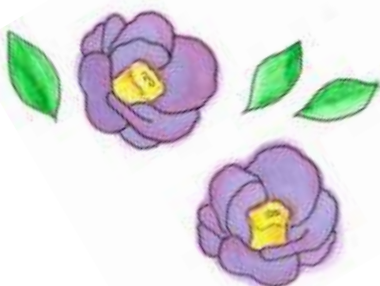
◆ひとくちに〈民話・伝説〉といっても、それが指し示す範囲と対象は驚くほど広い。しかも私は、遺憾ながら、この分野の専門家ではない。とはいえ〈伝説探訪〉的な仕事をすることも意外と多いので、自分の専門（＝怪奇幻想文学）と関わりある側面から、あれこれアクセスすることになる。……というわけで、まずは基本中の基本というべき一冊を。日本民俗学の父・柳田國男は、若き日、日本各處を旅しては〈国々に伝わった面白い、また異<sup>かわ</sup>った、不思議な物語を集めて見たい〉（泉鏡花「夜叉ヶ池」より）と志したという。その熱意は、後に本書や『木思石語』などに結実し、多くの若者を民俗学の沃野へ誘った。出逢いの衝撃に満ちた好著である。

## 6.『現代の民話——あなたも語り手、わたしも語り手』 松谷みよ子著 中公新書 2000

◆幻想的な文学との接点において、柳田國男の情熱を後代へ受け継いだひとりが、松谷みよ子ではなかろうか。大著『現代民話考』第一期・第二期の全十二巻は、その得がたい結実だが、ここにはそれらのエッセンスというべき本書を掲げておく。ごく限られた紙面の中に、〈偽汽車〉や〈夢〉や〈戦争〉、〈トイレの花子さん〉や〈遠野物語〉を俎上にのぼせて、現代社会に生起する新たな民話の姿が、豊富な実体験談を交え、たいそう印象的に浮き彫りにされてゆく。著者の志を継ぐ、令和の民話探索者の登場が、切に待望されるところだ。

## 7.『日本警見記』上下 小泉八雲著 平井呈一訳 恒文社 2009

◆ところで、初期の柳田國男が、『ケルトの黄昏』に始まるアイルランドの詩人W・B・イエイツによる民話研究を、ひとつのお手本にしていたのは、有名な話である。実は日本の民話伝説の探求に際して、柳田に一歩先んじていた存在に、小泉八雲ことラフカディオ・ハーンがいた。ハーンが来日後、初めて公刊した大著『日本警見記』（『知られぬ日本の面影』のタイトルでも知られる）の中には、有名な「鳥取の布団」をはじめとして、土俗の坩堝へみずから飛び込み、そこで得られた「はなし」が凝縮されている。日本民俗学の、もうひとりの先覚者として、今年、来日から130年の節目を迎えた八雲の名も、忘れることはできないだろう。



リストの7タイトルは、  
田原市図書館で  
貸出・予約可能な資料です。  
2020.12 作成